



TITLE:

2)「研究開発コロキウム」報告〔要約版〕：〔大学院GP〕採択：心理臨床における箱庭を介したかわりに関する研究--特別養護老人ホームでの調査から--

AUTHOR(S):

大石, 真吾; 角野, 善宏; 加藤, 奈奈子; 千秋, 佳世; 佐々木, 麻子; 高橋, 優佳; 森崎, 志麻; 浅田, 恵美子; 井芹, 聖文

CITATION:

大石, 真吾 ...[et al]. 2) 「研究開発コロキウム」報告〔要約版〕：〔大学院GP〕採択：心理臨床における箱庭を介したかわりに関する研究--特別養護老人ホームでの調査から--. 研究開発コロキウム: 平成21年度 成果報告書 (Colloquium for Educational Research and Development) 2010: 40-41

ISSUE DATE:

2010-03-31

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/143153>

RIGHT:

心理臨床における箱庭を介したかかわりに関する研究
—特別養護老人ホームでの調査から—

A study of interaction through sandplay in Clinical Psychology.

—from the research at a nursing.

研究代表者：大石 真吾 (D2)

指導教員：角野善宏

研究分担者：加藤 奈奈子 (D3)・千秋 佳世 (D3)・佐々木 麻子 (D2)・高橋 優佳 (D1)

森崎 志麻 (D1)・浅田 恵美子 (M2)・井芹 聖文 (M1)

〔研究目的〕

近年、様々なフィールドに入り心理的援助を行う専門家が必要とされているが、心理臨床とは異なるフィールドにおいて、現場職員らの理解が得られず、心理的援助を行う以前に自らの役割を果たす場の構築に苦慮することは少なくない。こうした問題に指針を与えるのが、本研究の母体となる箱庭療法研究会が行った特別養護老人ホームにおける高齢者の継続箱庭制作調査であり、この調査では、一対一のかかわりを軸としながらも、箱庭を介して個別的なかかわりが施設全体とのかかわりとしても展開していくような影響が見られた。このかかわりという側面から見た箱庭の機能は、箱庭がもたらす新たな可能性であり、このような可能性を様々な角度から検証する試みが、上記テーマで採択され、これまで2年間に渡り実施されてきた本研究である。本年度は昨年度実施した施設の生活の場に箱庭を持ち込む調査を継続すると共に、そこで見出された「祭り」「鮮やかさ」「個別性」といったテーマに焦点を当てつつ、施設の場において何が生じていたのかを多角的に検証することを目的とした。

〔研究経過〕

本研究では、特別養護老人ホームでの調査を軸としつつ、そこで見出されたテーマについて考察を深めていくために、4つの活動を同時並行的に進めていった。

① 特別養護老人ホームでの調査

2グループに分かれ、それぞれ月1回の頻度で継続した(現在も継続中で、開始から1年8ヶ月が経過している)。またメンバー内で、月1回定期的な報告会を行ったほか、

職員に向けた報告会も実施した。

② 講師招聘による講演会

特別養護老人ホームでの調査で見出された「祭り」的な側面について検討することを目的として、i. 世界の祭り DVD 鑑賞会およびだんじり祭ビデオ鑑賞会（話題提供：角野善宏先生）、ii. 南アフリカでの箱庭実践に関する講演会（発表：リース・滝・幸子先生）を実施した。

③ 学会発表

調査で見出された箱庭の「鮮やかさ」について考察を深めるため、日本心理臨床学会第28回秋季大会(2009年9月21日)にて「箱庭のもつ『鮮やかさ』に関する試論—特別養護老人ホームでの調査から—」として基礎・調査研究発表を行った。

④ ケースカンファレンス

調査を通して、作り手の個別的なテーマに注目されることが多くなったこともあり、箱庭作品を事例的な視点から検討する力を養う目的で、ケースカンファレンスを行った（発表者：研究メンバー、コメンテーター：岡田康伸先生）。なお1月27日には高野祥子先生を発表者としてお招きしてのケースカンファレンスも実施予定である。

〔研究成果〕

②③④を通して多角的に①の活動について検討が行われた。②からは、だんじりという容れものが存在感を放つこと、それに人々がコミットメントしていくことが、祭りの雰囲気が生み出される上で重要ではないかと考えられた。③からは、箱庭を日常の場に持ち込む行為が、非日常的な「鮮やかさ」を備えたモノを持ち込む試みとして捉えられ、そこに作り手がかかわるなかで、作り手の在りようもまた「鮮やかさ」を持つものとして生み出されるのではないかと考えられた。④からは、そうした作り手の「鮮やかさ」がかかわりのなかで展開する様を確認すると共に、そうした「鮮やかさ」を引き受け、そこに在り続ける者として、我々の在りようというものもまた、「鮮やかさ」をもって浮かび上がったのではないかと考えられた。